

<論説>

資本の循環範式に内在する謎

頭 川 博

目 次

- はしがき—問題の所在
- 一 資本の循環範式における生産過程の範囲
 - 二 生産資本の存在形態とその機能
 - 三 生産資本の二重表示の理論的根拠

はしがき—問題の所在

周知の通り、資本の循環範式 $G \rightarrow W \leftarrow \overset{A}{P}_m \cdots P \cdots W' \rightarrow G'$ は、生産過程での資本の実質的な変態（生産資本の商品資本への転化）と流通過程での資本の形態的な諸変態（貨幣資本の生産資本への転化と商品資本の貨幣資本への転化）との総計によって成り立つ資本の循環過程の図式的表現である。ところで、マルクスの規定によれば、資本の循環範式 $G \rightarrow W \leftarrow \overset{A}{P}_m \cdots P \cdots W' \rightarrow G'$ のうちで、実線（→）は流通過程を表わし、点線（⋯）は流通過程の中断を表わす。「資本の循環過程は三つの段階を通過して進み、これらの段階は、第一巻の叙述によれば、次のような順序をなしている。

第一段階。資本家は商品市場や労働市場に買い手として現われる。彼の貨幣は商品に転換される。すなわち流通行為 $G \rightarrow W$ を通過する。

第二段階。買われた商品の資本家による生産的消費。彼は資本家的商品生産者として行動する。彼の資本は生産過程を通過する。その結果は、それ自身の生産要素の価値よりも大きい価値をもつ商品である。

第三段階。資本家は売り手として市場に帰ってくる。彼の商品は貨幣に転換される。すなわち流通行為 $W \rightarrow G$ を通過する。

そこで、貨幣資本の循環を表わす定式は次のようになる。 $G—W…P…W'—G'$ 。ここで点線は流通過程が中断されていることを示し、 W' と G' は、剰余価値によって増大した W と G を表わしている。」(Kapital, II, S. 31, 四角点—マルクス)

従って、資本の循環範式に関するマルクスの規定に従えば、点線はそれ自体としては流通過程の中断という消極的な意味しかもたず、流通過程と対をなす生産過程を直接的に表現しないことに最大限注意を要する。実際、現行版『資本論』第Ⅱ巻でのマルクスの明言的な規定によれば、資本の循環過程の第二段階を形成する生産過程つまり生産資本の商品資本への実質的な変態は、資本の循環範式の上では $P…W'$ によって表現されるのである。つまり、資本の循環範式 $G—W<_{P_m}^A…P…W'—G'$ において、 $W<_{P_m}^A$ が生産資本という明確な概念規定を受けとるのに反して、 $W<_{P_m}^A…P…W'$ 全部が直接的生産過程を表わすのでは全然なく、 $P…W'$ 部分のみが流通過程と対をなす生産過程を表現するにすぎないのである。従って、われわれの到達した結論の一つを先回りしていえば、マルクスが注意深くも最初に点線をもって流通過程の中断を表現すると消極的に規定した所以は、 $W<_{P_m}^A…P…W'$ における点線全部が生産過程を表わすのではなく、実は $P…W'$ のみが生産過程を意味するためにほかならないのである。

ところが、資本の循環範式 $G—W<_{P_m}^A…P…W'—G'$ の中で $P…W'$ のみが厳密な意味での生産資本の商品資本への実質的な変態を表現するにすぎないとすれば、われわれはマルクスが資本の循環範式において何故に $G—W<_{P_m}^A$ を貨幣資本の生産資本への転化と規定しながら流通過程での生産資本($W<_{P_m}^A$)と生産過程での剰余価値生産という固有な機能を果たす生産資本(P)とを相異なる定在として区別して表現したのかというごくプリミティブな疑問に直面する。マルクスは、資本の循環範式において $G—W<_{P_m}^A$ の $W<_{P_m}^A$ を生産資本と規定しながら、何故に $W<_{P_m}^A…P…W'$ 全部を生産過程=生産資本の商品資本への実質的な変態過程と規定せずにあえて $P…W'$ をもって生産過程と規定したのであろうか。ここには、われわれが『資本論』第Ⅱ巻を繙く際に解決を与

えるべき一つの基本論点があるように思われる。というのも、われわれの積極的見解に立脚していえば、 $G-W < \frac{A}{P_m} \cdots P \cdots W' - G'$ の中の $P \cdots W'$ だけを直接的生産過程＝生産資本の商品資本への実質的な変態過程となすマルクスの規定は、生産過程で剰余価値生産を開始する生産資本の固有な存在形態に関する規定と相即不離の関係にあるからである。つまり、流通過程での貨幣資本の直接的な転化形態としての生産資本($W < \frac{A}{P_m}$)と生産過程で剰余価値生産を開始する生産資本(P)とは、概念上その定在様式を根本的に異にするがゆえに、マルクスは同じ概念規定にある生産資本を資本の循環範式上 $G-W < \frac{A}{P_m}$ の $W < \frac{A}{P_m}$ と $P \cdots W'$ の P として区分して表現したように思われる。けだし、生産資本は、生産過程にあっては流通過程とは違って、特定の使用価値をもつ超歴史的な生産条件としてのみ剰余価値生産において機能するにすぎないからである。たとえば、生産資本の不変資本成分の一つである機械についていえば、機械は、商品としては流通過程上で使用価値と価値との二重物として機能するが、生産過程上では具体的有用労働の凝固物たる単なる使用価値としてのみ産業的に消費されるにすぎず、抽象的人間労働の凝固物としては存在しないのである。それだから、もし人あって資本の循環範式上同じ概念規定をもつ生産資本を $W < \frac{A}{P_m}$ と P とに区別して表現する真の理由に曖昧さがあるとすれば、それは資本の本質的機能をなす剰余価値生産に従事する生産資本とりわけその不変資本成分の定在様式に関する不分明さに起因するようにわれわれには思われる。従って、 $G-W < \frac{A}{P_m} \cdots P \cdots W' - G'$ のうちで $P \cdots W'$ だけを生産資本の商品資本への実質的な変態過程とマルクスが規定した真の理由如何は、生産資本とりわけその不変資本成分が如何なる定在様式の下で剰余価値生産に携わるのかにかかわる『資本論』体系上の一つの基本論点である。

しかし、われわれのサーヴェイによれば、資本の循環範式に関する従来の見解には、一方でマルクスの規定の無意識的な取り違えから $W < \frac{A}{P_m} \cdots P \cdots W'$ 全部を生産過程とみなす議論と他方で $P \cdots W'$ だけを生産過程とするマルクスの規定それ自体は一応押さえながらもそれを理解困難として $W < \frac{A}{P_m} \cdots P \cdots W'$ 全部によって生産過程を代表させようとする議論とが同時併存しているように思

われる。つまり、単刀直入に言えば、資本の循環範式に関する従来の支配的な見解は、 $P \cdots W'$ をもって生産資本の商品資本への実質的な変態過程となすマルクスの厳密な規定に背反して、 $W < \overset{A}{P}_m \cdots P \cdots W'$ 全部を生産過程とみなす議論にはかならない。しかし、先ず第一に、マルクスの規定の無意識的な取り違えから $W < \overset{A}{P}_m \cdots P \cdots W'$ 全部を生産過程とみなし生産資本の商品資本への実質的な変態を $W < \overset{A}{P}_m$ の W' への転化と考える議論についていえば⁽¹⁾、後に厳密に証明するように、それは現行版『資本論』第Ⅱ巻でのマルクス自身の明言的な規定と明らかに抵触する。つまり、 $W < \overset{A}{P}_m \cdots P \cdots W'$ 全部を生産資本の商品資本への実質的な変態過程とみなす従来の議論の大半は、マルクスが $G - W < \overset{A}{P}_m$ の $W < \overset{A}{P}_m$ をもって生産資本と概念規定したことから単純かつ短絡的に $W < \overset{A}{P}_m \cdots P \cdots W'$ 全部を生産過程と早合点した恣意の産物にすぎない。第二に、マルクスの厳密な規定にあえて背反して意識的に $W < \overset{A}{P}_m \cdots W'$ 全部を生産過程とみなす一部の議論に関していえば⁽²⁾、それは単に $P \cdots W'$ を生産資本の商品資本への実質的な変態過程と規定するマルクスの理論の理解困難性から提出されているにすぎないのである。換言すれば、 $W < \overset{A}{P}_m \cdots P \cdots W'$ 全体を意識的に生産過程と規定する一部の見解には、 $P \cdots W'$ だけを生産過程とするマルクスの規定に対する理解の困難さに関する指摘はあっても、みずからが提出するアンチ・テーゼに対する積極的証明がない。従って、 $P \cdots W'$ だけを生産過程と規定するマルクスの考え方の背後に隠れた真の意図をわれわれが発掘するならば、意識的に $W < \overset{A}{P}_m \cdots P \cdots W'$ 全部を生産過程とみなす一部の主張の皮相性が明らかになるにちがいない。

それゆえに、本稿の課題は、マルクスが資本の循環範式 $G - W < \overset{A}{P}_m \cdots P \cdots W' - G'$ において $P \cdots W'$ をもって生産資本の商品資本への実質的な変態過程と規定した真の理由を確定することにある⁽³⁾。以下、先ず第一節において、現行版『資本論』第Ⅱ巻の叙述に極力内在してマルクスが $P \cdots W'$ だけを生産過程＝生産資本の商品資本への実質的な変態過程と規定した客観的な事実を文献考証し、続く第二節において、マルクスが同じ生産資本という概念規定を受けとる定在を $G - W < \overset{A}{P}_m$ と $\overset{\cdot}{P} \cdots W'$ として二重表示した所以を確定する布石として剰

余価値生産に従事する生産資本中の不変資本成分の定在様式を考察する。そして、最後の第三節において、第二節での考察を論理的基礎にすえてマルクスが生産資本の商品資本への実質的な変態を $P \cdots W'$ で表現した真の理由を謎解きして本稿の課題を最終的に解決する。『資本論』体系に内在した本稿の理論的考察によって、本年3月14日をもって没後100年をむかえたマルクスの論理的思考能力の強靱さが改めてクローズ・アップすることになるろう。

- (1) $P \cdots W'$ をもって生産過程とするマルクスの規定に背反して無意識的に $W < \frac{A}{P_m} \cdots P \cdots W'$ 全体を生産資本の商品資本への実質的な変態過程とみなす文献は、ローゼンベルグ『資本論注解』を典拠例として枚挙にいとまがない。従って、本稿では $W < \frac{A}{P_m} \cdots P \cdots W'$ 全体をもって生産過程とみなす文献紹介は割愛した。
- (2) マルクスの規定に背反して意識的に $W < \frac{A}{P_m} \cdots P \cdots W'$ を生産過程とみなす文献は、日高普『資本の流通過程』（東大出版会、1978年）によって代表される。
- (3) われわれは、以前に「資本の流通過程と資本の循環範式—『資本論』第Ⅱ巻第一篇の解明—」（『商学論集』第46巻第2号、1977年）を公表して『資本論』第Ⅱ巻第一篇に関するわれわれの基本的な考え方を提示したが、その際『資本論』第Ⅱ巻でのマルクスの規定に忠実に従って $P \cdots W'$ をもって生産資本の商品資本への実質的な変態過程と説明した（拙稿「資本の流通過程と資本の循環範式」63ページ）。しかし、前稿執筆時点ではマルクスが何故に生産資本の商品資本への実質的な変態過程を $W < \frac{A}{P_m} \cdots P \cdots W'$ 全体ではなく $P \cdots W'$ のみで規定したのかという問題の所在認識において不十分さがあつた。そこで、本稿では、マルクスが何故に $P \cdots W'$ のみを生産資本の商品資本への実質的な変態過程と規定したのかという『資本論』第Ⅱ巻第一篇に内在する一つの基本論点に本格的な証明を与える。

一 資本の循環範式における生産過程の範囲

はしがきで述べたように、本稿の課題は、資本の循環範式においてマルクスが $P \cdots W'$ をもって生産資本の商品資本への実質的な変態過程と規定した所以を謎解きすることにある。ところが、本稿の課題解決の論理的前提は、マルクスが $P \cdots W'$ だけを生産過程と規定した事実そのものの確認にある。ただし、従来学界の一部には、マルクスが $W < \overset{A}{P}_m \cdots P \cdots W'$ 全体をもって生産過程と規定したと早合点する無意識的な取り違えが少なからず見受けられるからである。従って、本節の課題は、マルクスが資本の循環範式 $G - W < \overset{A}{P}_m \cdots P \cdots W' - G'$ において $P \cdots W'$ だけを直接的生産過程と規定した確固たる事実を『資本論』第Ⅱ巻に内在して文献考証的に確認することにある。

すでに指摘した通り、資本の循環範式において、実線は流過程を積極的に表現する⁽¹⁾が、点線は流過程の中断という消極的な事柄を意味するにすぎない。従って、 $W < \overset{A}{P}_m \cdots P \cdots W'$ 全体が生産過程を直接的に表現するものではないことは、点線が流過程の中断という事柄しか消極的に意味しないというマルクスの当初の約束のうちに即自的に内包されているのである。そもそも $W < \overset{A}{P}_m \cdots P \cdots W'$ が全体として生産資本の商品資本への実質的な変態過程を表現するとするならば、むしろ最初から点線は明確に生産過程を表わすと規定されるべきであったということになるからである。しかし、 $P \cdots W'$ のみが生産過程を表現するというマルクスの規定に関しては、確たる典拠が『資本論』第Ⅱ巻第一篇に実在する。

先ず第一に、マルクスが $P \cdots W'$ のみを生産過程＝生産資本の商品資本への実質的な変態過程と規定した決定的典拠は、以下に示したいくつかの引用文にある。

「 $G - \dot{W} < \overset{A}{P}_m$ が行なわれれば、 G は生産資本に、 \dot{P} に、再転化しており、そこでまた新しく循環が始まる。

そこで $P \cdots W' - G' - W \cdots P$ を詳しくした形態は次のようになる。

$$P \cdots W' \left\{ \begin{array}{l} W \\ + \\ w \end{array} \right\} - \left\{ \begin{array}{l} G \\ + \\ g \end{array} \right\} - W < \overset{A}{P}_m \cdots P$$

」 (Kapital, II, S.79, 圀点一頭川)

川)

「形態Ⅱ, $P \cdots W' - G' - W \cdots P (P')$ では、総流通過程が第一のPのあとに続き、第二のPに先行している。しかし、それは形態Ⅰとは反対の順序で行なわれる。第一のPは生産資本であって、その機能は、あとに続く流通過程の先行条件としての生産過程である。これに反して、結びのPは生産過程ではない。それは、ただ、産業資本が再び生産資本の形態で存在しているだけのものである。しかも、それがこのようなものであるのは、最後の流通段階で資本価値が $A + P_m$ に、すなわち相合して生産資本の存在形態をなす主体的要因と客体的要因とに、転化した結果としてである。」 (Ibid., II, S.96, 圀点一頭川)

「形態Ⅱでは生産資本の単なる再存在としてのPで循環が終わったように、形態Ⅲでは商品資本の再存在としてのWで循環が終わる。形態Ⅱでは終結形態Pにある資本が再び過程を生産過程として始めなければならない。」 (Ibid., II, S.97, 圀点一頭川) 「形態Ⅱのなかの終わりのPはGの転化した形態である。」 (Ibid., II, S.98) 「 $G \cdots G'$ と $P \cdots P$ では、終末の極であるG'とPは、流通過程の直接の結果である。」 (Ibid., II, S.100, 圀点一頭川)

みられるように、ここでは、点線が単に消極的に流通過程の中断を表現するにすぎないという最初の規定と論理整合的に、 $P \cdots W'$ のみが生産過程と規定されていることは確定的な事実である。それゆえにまた、『資本論』第Ⅱ巻において、マルクスは、生産過程での生産資本の商品資本への実質的な変態を $\dot{W} < \overset{A}{P}_m$ のW'への転化としてではなく、 \dot{P} のW'への転化として表現したのである。つまり、『資本論』第Ⅱ巻において生産資本の商品資本への実質的な変態が \dot{P} のW'への転化として規定され $\dot{W} < \overset{A}{P}_m$ のW'への転化と規定されていないのは、 $G - W < \overset{A}{P}_m \cdots P \cdots W' - G'$ のうち $P \cdots W'$ だけが生産過程であることの一つの例証である。

「10,000ポンドの糸が商品資本W'であるのは、ただ生産資本Pの転化した形

態としてのみのことである。」(Kapital, II, S. 45)

「生産要素から商品生産物への転化、PからW'への転化は生産部面で行なわれ、W'からPへの再転化は流通部面で行なわれる。」(Ibid, II, S. 78)

「形態Ⅲでは、W'は生産資本Pの形態転化である。」(Ibid, III, S. 99)

なるほど、『資本論』第Ⅱ巻ではP…W'をもって生産過程と規定するマルクス自身の叙述は、主として生産資本の循環P…W'—G'—W…Pによって与えられている。しかし、貨幣資本の循環G—W…P…W'—G'も生産資本の循環もともにまったく同じ資本変態の三つの相異なる段階から成り立つかぎりでは、主として生産資本の循環の箇所で与えられたP…W'を生産過程となす規定は貨幣資本の循環という産業資本の循環の一般的形態にも完全に妥当すると考えねばならない。勿論、流過程が生産過程によって媒介されるか(貨幣資本の循環)それとも生産過程が流過程によって媒介されるか(生産資本の循環)に応じて、資本の流過程の内包する概念的内容は違ってくるのであるが。

いうまでもなく、『資本論』第Ⅱ巻ではP…W'のPをもってW'へ転化する主体としての生産資本としてではなく単純に生産過程と規定している箇所が少なからず存在することもまた否定できない事実である。たとえば、以下のいくつかの引用文は、マルクスがG—W…P…W'—G'のうちのPを生産過程と規定している代表的な箇所である。

「価値変化はただ変態Pすなわち生産過程だけで起きるのであり、したがって、生産過程は、流通の単に形態的な諸変態にたいして、資本の実質的な変態として現われる。」(Kapital, II, S. 56, 圈点一頭川)

「生産過程Pは生産的消費を含んでいる。」(Ibid., II, S. 62)

「W'はそれ自身また生産過程Pの過去の機能の生産物である。」(Ibid., II, S. 76)

しかし、マルクスがPを単純に生産過程と規定したいいくつかの論述を抛り所にしてそこから $W < \underset{P_m}{A} \dots P \dots W'$ 全体を生産過程とみなす見解は、牽強付会という謗りを免れないように思われる。というのも、資本の循環範式G—W…P

$\dots W' - G'$ のうち G や W あるいは W' は流通過程上での資本の固有な存在形態をそれぞれ表現することとの概念的な対応関係からするならば、 P は何よりも本質的には生産過程での資本の固有な存在形態そのものの表現でなければ首尾一貫しないことになるからである。また、 P をもって基本的に生産過程そのものの表現とみなすならば、それは P を W' へ転化する主体としての生産資本となしたマルクスの明言的な規定と抵触することに結果する。従って、 P をもって生産過程となすマルクス自身のいくつかの叙述は、 $P \dots W'$ を生産資本の商品資本への実質的な変態とするマルクスの基本規定との対応関係の下でそれと抵触しない派生的規定として解釈されるべきである。従って、あえていえば、 $P \dots W'$ をもって生産資本の商品資本への実質的な変態となすマルクスの基本規定を無視して、 P を生産過程となすいくつかの叙述に依拠して $W < \frac{A}{P_m} \dots P \dots W'$ 全体を生産過程とみなす見解は、その解釈上の恣意性ゆえに成立しがたいように思われる。われわれの見解によれば、 $P \dots W'$ を生産資本の商品資本への実質的な変態となす基本規定が実在する以上、 P を生産過程と言い換えたいくつかの叙述はそれ自体決して $W < \frac{A}{P_m} \dots P \dots W'$ 全体をもつて生産過程とみなす見解の典拠たりえないのである。なぜならば、 $P \dots W'$ を生産資本の商品資本への実質的な変態となす基本規定は、生産資本 P の固有な資本機能発揮の開始が同時に生産過程の開始を意味するがゆえに P をもつて生産過程となす派生的規定を内包しているからにはかならない。それゆえに、 P を生産過程とするいくつかの叙述に決定的優先権を与え $W < \frac{A}{P_m} \dots P \dots W'$ 全体を生産過程とみなす見解は、生産資本 P の固有な資本機能発揮の開始が同時に生産過程の開始を意味するがゆえに P を生産過程と言い換えたにすぎないマルクスの真意の汲み取り方に不十分さがあるように思われる。なお、理論的厳密さを期す目的で指摘しておけば、 P はそれ自体として生産過程を表現するとみなす主張は次の事柄を考えただけでも成立する余地が存在しないのである。というのは、 $W < \frac{A}{P_m} \dots P \dots W'$ 全体が生産過程を表わすとみなす見解は点線がそのものとして直接的に流通過程と対をなす生産過程を表わすという主張に帰着するから、ここでは点線の間にあえて生産過程を示す P を入れる必要性など概念上存在しないはずだから

である。従って、 P を基本的に生産過程表現と考えるならば、点線が直接的に生産過程を表わすのになおかつ生産過程を表わす P を挿入するという重複的な手続きを勞したという批判をマルクスが甘受せざるをえない羽目に陥ることになる。

第二に、 $P \cdots W'$ のみが生産資本の商品資本への実質的変態過程を表現することを示す一つの文献的典拠は、マルクスが資本の循環範式 $G-W \cdots P \cdots W'-G'$ の第一段階 $G-W < \frac{A}{P_m}$ の規定にあたって貨幣資本(G)の生産資本($W < \frac{A}{P_m}$)への転化を同時に貨幣資本(G)の生産資本(P)への転化と言い換え、概念上 $G-W < \frac{A}{P_m}$ を同時に $G-W < \frac{A}{P_m} \cdots P$ の達成と規定しているところにある。「彼が貨幣形態で前貸した価値は、今では剰余価値(商品の姿での)を生む価値として実現されることを可能にする現物形態をとっているのである。言い換えれば、その価値は、価値と剰余価値をつくりだすものとして機能する能力をもっている生産資本という状態または形態にあるのである。この形態にある資本を P と呼ぶことにしよう。

ところで、 P の価値は、 $A \cdot \text{プラス} \cdot P_m$ の価値であり、 A と P_m とに轉換された G に等しい。 G は P と同じ資本価値であって、ただ、存在様式が違うだけである。」(*Kapital*, II, S. 33-4, 圈点—マルクス)

また、流通過程上での $G-W < \frac{A}{P_m}$ が事実上 $G-W < \frac{A}{P_m} \cdots P$ の達成を意味することについては次の一文がそれを補強する。

「生産要素から商品生産物への転化、 P から W' への転化は生産部面で行なわれ、 W' から P への再転化は流通部面で行なわれる。」(*Kapital*, II, S. 78)

みられるように、ここでは、流通過程上での $G-W < \frac{A}{P_m}$ が事実上 $G-W < \frac{A}{P_m} \cdots P$ の達成を意味することがマルクス自身によって明言されているのである。換言すれば、マルクスが流通過程上での $G-W < \frac{A}{P_m}$ をもって事実上の $G-W < \frac{A}{P_m} \cdots P$ の達成と規定したことは、 $W < \frac{A}{P_m} \cdots P \cdots W'$ 全体を生産過程とみなす見解の成立を根底から否定する。なお、念のために断わっておけば、「 W' から P への再転化は流通部面で行なわれる」という一文は、実線のみが

直接的に流過程を表現するという根本約束がある以上、 $W' - G' - W < \frac{A}{P_m} \dots$
 P の $W < \frac{A}{P_m} \dots P$ 部分もまた流過程をなすということを示しも意味しない。 W'
 から P への再転化が流通部面で行なわれるというのは、単に生産資本として固有の資本機能を生産過程で開始する P が貨幣資本の直接的な転化形態としての生産資本 $W < \frac{A}{P_m}$ の生産過程上での再存在でしかなく、その意味では、生産過程を開始する生産資本 P は $W < \frac{A}{P_m}$ と同様に流過程の媒介によって調達された資本の存在形態であるということを強調したものにすぎない。従って、 W' の P への再転化が流通部面で行なわれるという一文は、 $P \dots W'$ をもって生産過程となすマルクスの基本規定と首尾一貫した関係にある。

かくて、われわれは、以上の考察によって、資本の循環範式上生産資本の商品資本への実質的変態過程が $W < \frac{A}{P_m} \dots P \dots W'$ ではなく $P \dots W'$ によって表現されることは歴然たる不動の事実であることを文献考証した。従って、資本の循環範式 $G - W < \frac{A}{P_m} \dots P \dots W' - G'$ は、生産過程での資本の実質的変態 $P \dots W'$ と流過程での資本の形態的諸形態 $G - W < \frac{A}{P_m} \cdot W' - G'$ との総計から形成されたものにほかならない。

ところが、資本の循環範式に占める生産過程のマルクスによる確定的な規定に背反して、従来 $W < \frac{A}{P_m} \dots P \dots W'$ 全部を生産過程＝生産資本の商品資本への実質的変態過程と取り違える見解が少なからず見受けられるのがいつわらざる実情である。たとえば、以下の引用文にみられるローゼンベルクの見解は、マルクスが $P \dots W'$ を生産過程と規定したのに反してそれを無意識的に取り違えて $W < \frac{A}{P_m} \dots P \dots W'$ を生産過程とみなす論調の典型例である。

「 $G - W < \frac{A}{P_m} \dots P \dots W' - G'$ 第一の流通段階 $G - W$ では、貨幣は二種類の商品に、すなわち、(一)労働力(A でしめす)と(二)生産手段(P_m であらわす)とに、転化する。第二段階 $\dots P \dots$ は生産過程で、これは流過程を中断する。第三段階 $W' - G'$ はふたたび流通段階である。」(『資本論注解』1, 青木書店, 宇高基輔・副島種典共訳, 248ページ)

いうまでもなく、 $W < \frac{A}{P_m} \dots P \dots W$ 全体を生産資本の商品資本への実質的変態過程とみるローゼンベルクの主張は、 $P \dots W'$ を生産過程となすマルクスの

明言の規定が無視されている点で、『資本論』第Ⅱ巻との間に天地の隔たりがある。しかし、ローゼンベルグに代表される見解の根本欠陥は、 $W < \overset{A}{P}_m \dots P \dots W'$ 全体を生産過程とみなすならば至る所で抜きさしならない前後撞着に直面せざるをえないところにある。

先ず第一に、 $W < \overset{A}{P}_m \dots P \dots W'$ 全体が生産過程であると主張するならば、生産資本 $W < \overset{A}{P}_m$ と商品資本 W' との間に介在する P という記号は概念上不要である。なぜならば、先刻指摘した通り、 $W < \overset{A}{P}_m \dots P \dots W'$ 全体が生産過程を表わすとするならば、そこから点線は直接的に生産過程を表示するという論理的帰結が発生することになり、点線で表現された生産過程の中間に改めて生産過程を表示する P という記号を挿入することは、いわば重複的な手続きにしすぎないことになるからである。従って、 $W < \overset{A}{P}_m \dots P \dots W'$ 全体を生産過程と規定しながらなおかつ生産過程を表示する P という記号を挿入するのは、首尾一貫性を欠くように思われる。因みに、点線が直接的に生産過程を表現するという解釈に立脚して資本の循環範式を『資本論』第Ⅱ巻の規定と異なって $G - W < \overset{A}{P}_m \dots W' - G'$ と表現する岩田弘氏の見解は、理論上の首尾一貫性においてみごとであるといつてよい。「資本の運動は…資本価値の流通運動としては、まず、貨幣資本の循環、すなわち、貨幣資本から出発して貨幣資本へと回流する循環 $G - W < \overset{A}{P}_m \dots W' - G'$ である。」(岩田弘『マルクス経済学』(上)、盛田書店、1967年、129ページ、圈点—岩田氏)

なお、付け加えておけば、 $W < \overset{A}{P}_m \dots P \dots W'$ 全部が生産過程を表わすとするならば点線の中間の P という記号は不要であるというわれわれの批判に対して、 P は生産過程で稼働中の生産資本の現実的な存在形態を表現する記号として必要不可欠であるという反論が返ってくるのが予想される。しかし、一方で点線が直接的に生産過程を表現すると主張しながら他方で P が稼働中の生産資本を表わすというのは、資本の循環範式に関するマルクスの明言の規定を否定しながらなおかつ自己の見解と整合しない主張をこっそり盛りこむ理不尽な論法であるといつて決して過言でないように思われる。というのも、点線がストレートに生産過程を表現するとすれば、貨幣資本の直接的な転化形態である

生産資本 $W < \overset{A}{P}_m$ はそのまま 剰余価値生産に入りこむところの稼動中の生産資本の現実的な存在形態を代表することになるから、生産過程の途上にある生産資本をその出発点に位置する生産資本 $W < \overset{A}{P}_m$ から独自に区別して P という記号で表現すべき論理的必然性は少しも存在しないからである。それゆえに、点線が直接的に生産過程を表現すると主張しながらなおかつ $W < \overset{A}{P}_m \cdots P \cdots W'$ の中間に生産過程を表現する P あるいは稼動中の生産資本を表現する P を挿入するという見解は、自己の立脚する原則的立場に忠実でない点で説得力に欠けるように思われる。

第二に、 $P \cdots W'$ を生産過程と規定する『資本論』第Ⅱ巻の立場に背反して $W < \overset{A}{P}_m \cdots P \cdots W'$ 全部を生産過程とみなすならば、生産資本の商品資本への実質的変態は $\dot{W} < \overset{A}{P}_m$ の W' への転化と規定されることになるから、生産資本の循環範式は、それがマルクスの規定通り $P \cdots W' - G' - W < \overset{A}{P}_m \cdots P$ と表現されるかぎり、資本の三つの相異なる段階 ($P \cdots W' / W' - G' / G - W < \overset{A}{P}_m \cdots P$) からではなく資本の四つの段階から成り立つという逆説 ($P \cdots W' / W' - G' / G - W < \overset{A}{P}_m / W < \overset{A}{P}_m \cdots P$) が生じることになる。つまり、生産資本の循環 $P \cdots W' - G' - W' < \overset{A}{P}_m \cdots P$ が貨幣資本の循環範式や商品資本の循環範式と同じように資本の三つの相異なる段階から構成されるのは、資本の循環範式においては一般的に $P \cdots W'$ 部分だけが生産過程を表現するからにほかならない。従って、資本の三つの相異なる段階を表現する生産資本の循環範式 $P \cdots W' - G' - W < \overset{A}{P}_m \cdots P$ は、 $P \cdots W'$ 部分だけが生産過程を表現することの一つの回帰的証明を内包する。また、 $W < \overset{A}{P}_m \cdots P \cdots W'$ 全部を生産過程とみなす見解を首尾一貫させれば、生産資本の循環範式はマルクスの規定に逆らって $W < \overset{A}{P}_m \cdots P \cdots W' - G' - W < \overset{A}{P}_m$ と書き改められねばならないことになる。われわれの見解に立てば、マルクスの場合には生産資本の商品資本への実質的変態が \dot{P} の W' への転化として規定されるがゆえに、生産資本の循環範式は生産過程そのもので開始される $P \cdots W' - G' - W < \overset{A}{P}_m \cdots P$ で表現されるのだからである。ところが、ローゼンベルグを始めとして $W < \overset{A}{P}_m \cdots P \cdots W'$ 全部を生産過程とみなす人々は、生産資本の循環範式をマルクスと同様に $P \cdots W' - G' - W < \overset{A}{P}_m \cdots P$

と表現しているのである。「生産資本の循環— $P \cdots W' - G' - W \cdots P$ —では、生産が前面におしだされ、生産によって循環が開始され、生産によって循環が終結する。」(『資本論注解』3, 99ページ, 圈点—頭川)われわれにとっては、一方で $W < \frac{A}{P_m} \cdots P \cdots W'$ 全部を生産資本の商品資本への実質的変態過程と規定しながら他方で生産資本の循環範式を $P \cdots W' - G' - W < \frac{A}{P_m} \cdots P$ と表現するのは一つの根本的な前後撞着であるように思われる⁽²⁾。

第三に、周知の通り、流通過程に延長された追加的生産過程である商品の運輸を専門的に担当する一つの独立した産業資本つまり運輸業に従事する資本の循環過程は、 $G - W < \frac{A}{P_m} \cdots P - G'$ として特別に表現される⁽³⁾が、点線が直接的に生産過程を表わすという立場に立つならば、運輸資本の固有な循環過程は、 $G - W < \frac{A}{P_m} \cdots P - G'$ というマルクスの規定と違って $G - W < \frac{A}{P_m} - G'$ として表現されなければ論理的不徹底さを避けがたいことになる。つまり、運輸資本の固有な循環過程が $G - W < \frac{A}{P_m} \cdots P - G'$ で表現されるのは、 $G - W < \frac{A}{P_m} \cdots P \cdots W' - G'$ のうちの $P \cdots W'$ だけを生産過程と規定したマルクスの根本的立場を示す一つの回帰的証明である。ところが、一方で点線が直接的に生産過程を表現するとみなす確たる立場に立つローゼンベルグは、他方で運輸資本の固有な循環範式をマルクスと同様に $G - W < \frac{A}{P_m} \cdots P - G'$ と表現しているのである。「運輸業では、資本の運動は特殊性をもっている。この運動は、 $G - W < \frac{A}{P_m} \cdots P - G'$ の姿でえがかれる。ここには本来ただ一つの流通段階 $G - W < \frac{A}{P_m}$ があるだけであって、それについて、生産資本は商品流通の媒介なしに直接に貨幣資本に移行する。」(『資本論注解』3, 89ページ)しかし、ローゼンベルグ流の見解の欠陥は単に点線を直接的に生産過程表現とみなす一方の主張と運輸資本の循環範式を $G - W < \frac{A}{P_m} \cdots P - G'$ で表現する他方の主張との間の論理的不整合性だけにあるのではない。ローゼンベルグ流の見解に内在する最大の問題点は、点線が直接的に生産過程を表現するというその論法に忠実に従えば流通過程に延長された追加的生産過程での運輸業の生産資本 P の固有な変態過程 $P - G'$ は $W < \frac{A}{P_m} \cdots P$ と $P - G'$ との機械的総計としていわば分裂的に表現されることになるところにある。つまり、点線が生産過程を表現するという一

方の主張と運輸資本の循環過程を $G-W \langle \overset{A}{P}_m \rangle \dots P-G'$ で表わす他方の主張とをともに前提するかぎりでは、流通過程で行なわれる運輸業の生産資本の特有な変態は $W \langle \overset{A}{P}_m \rangle \dots P-G'$ の全体で表現されるという奇妙な論理的帰結が不可避免的に生じるのである。われわれの推測から総じていえば、 $W \langle \overset{A}{P}_m \rangle \dots P \dots W' =$ 生産過程と規定するローゼンベルグの考え方は、『資本論』体系に忠実であろうとするその主観的な意図には客観的にそむく無意識的な取り違えに起因するように思われる。けだし、無意識的な取り違えによるのではないとするならば、一方で点線が生産過程を表わすとしながら他方で運輸資本の循環過程を $G-W \langle \overset{A}{P}_m \rangle \dots P-G'$ で表現するという二律背反的な誤りを冒すことはありえないからである。それゆえに、総じて、生産資本の商品資本への実質的変態を $\dot{W} \langle \overset{A}{P}_m \rangle$ の W' への転化と規定する見解は、それが $P \dots W'$ をもって生産過程とするマルクスの規定の無意識的な取り違えに起因するがゆえに、至る所で解決不能な難問に直面することになるのである。

かくして、われわれは、以上の脈絡において、マルクスが『資本論』第Ⅱ巻第一篇で $P \dots W'$ だけを生産過程＝生産資本の商品資本への実質的変態過程と規定している不動の事実を文献考証した。ところが、資本の循環範式 $G-W \langle \overset{A}{P}_m \rangle \dots P \dots W'-G'$ においてマルクスが一方で $G-W \langle \overset{A}{P}_m \rangle$ を貨幣資本の生産資本への転化と規定しつつ他方で $P \dots W'$ 部分だけを生産資本の商品資本への実質的変態過程と規定したとするならば、われわれはマルクスが何故に流通過程上での貨幣資本の直接的転化形態である生産資本 $\dot{W} \langle \overset{A}{P}_m \rangle$ と生産過程で現実的に剰余価値生産を開始する生産資本 \dot{P} とを資本の循環範式において概念的に区別して表現したのかという根本的な疑問に達着することになる。もしわれわれが資本の循環範式において流通過程上での貨幣資本の転化形態である生産資本 $W \langle \overset{A}{P}_m \rangle$ と剰余価値生産を現実的に開始する生産資本 P とを区別して表現したマルクスの真の意図に照明を与えないならば、資本の循環範式を意味不明な部分を残したままで活用するという理不尽な事態にみずからを陥らせることになる。従って、資本の循環範式において同じ生産資本という範疇を $G-W \langle \overset{A}{P}_m \rangle$ の $\dot{W} \langle \overset{A}{P}_m \rangle$ と $P \dots W'$ の \dot{P} とに概念上区別して二重表現したのは一体何故

かについて本格的な考察を加えることは、資本の循環範式を活用するわれわれに負わされた焦眉の課題である。そこで、次節では、資本の循環範式 $G-W < \frac{A}{P_m} \cdots P \cdots W' - G'$ に内在する謎に根本的な解決を与えるための布石を固める。

- (1) 流通過程とは一般的にいえば売り手から買い手への商品所有権の移転を意味するから、実線が直接的に表わす流通過程は、同一位置での資本の姿態変換を内容とする商品所有権移転を意味する場合 ($G-W < \frac{A}{P_m} \cdots P \cdots W' - G'$) もあれば場所変換を内容とする商品所有権移転を意味する場合 ($G-G-W-G'-G'$) もある。従って、実線は、それが単純に流通過程の表現であるかぎり、産業資本の流通にも利子生み資本の流通にも同等に適用可能である。逆にいえば、 $G-W < \frac{A}{P_m} \cdots P \cdots W' - G'$ における実線はそれ自体としては資本の形態的諸変態を意味することから、実線は一義的に資本の姿態変換を表わすと考えてはならない。
- (2) 但し、一方で $W < \frac{A}{P_m} \cdots W'$ 全体をもって生産過程と規定しつつ他方で生産資本の循環範式を $W < \frac{A}{P_m} \cdots P \cdots W' - G' - W < \frac{A}{P_m}$ と表現する首尾一貫した主張は岩田弘『マルクス経済学』(上)にある。「特定の生産過程に資本価値の大部分を固定された資本の運動は、生産資本の循環、 $W < \frac{A}{P_m} \cdots W' - G' \cdot G - W < \frac{A}{P_m}$ に表現される。」(同上、130ページ、圈点一岩田氏)しかし、第三節で詳論するように、岩田弘氏の見解は、貨幣資本の転化形態としての不変資本成分が二重的労働の凝固物としてそのまま生産過程で機能するとみる点で根本的に成立しがたいように思われる。
- (3) 「運輸業についての定式は、 $G-W < \frac{A}{P_m} \cdots P - G'$ となる。」(Kapital, II, S. 60)

二 生産資本の存在形態とその機能

すでにのべたように、本節の課題は、マルクスが資本の循環範式 $G - W < \frac{A}{P_m} \cdots P \cdots W' - G'$ において同じ生産資本という範疇を $G - \dot{W} < \frac{A}{P_m}$ と $\dot{P} \cdots W'$ とに区別して二重表現した謎を解くための布石を固めることにある。

いうまでもなく、資本の本質的な機能は直接的生産過程での剰余価値生産にある。そして、剰余価値生産は、資本の三つの相異なる機能的な存在形態をなす貨幣資本や生産資本あるいは商品資本のうちの生産資本によってのみ営まれる。従って、剰余価値生産という資本の本質的機能が資本の三つの相異なる姿態のうちの生産資本の固有な機能に属するがゆえに、産業資本は本質的に生産資本によって代表されるのである。つまり、端的に表現すれば、産業資本とは

その本質的機能を営む生産資本のことにほかならないのである。マルクスが生産資本を産業資本と言い換えた所以は、生産資本が産業資本の本質的機能たる剰余価値生産に従事する点において、すぐれて産業資本を代表するからである。「資本が諸局面の一つにとどまっているあいだは、それは商品資本 (Warenkapital)、貨幣資本 (Geldkapital)、ないしは産業資本 (industrielles Kapital) として固定されている。」(Grundrisse, III, S. 611) 勿論、生産資本がすぐれて産業資本を代表するということは、貨幣資本や商品資本が流通過程上で資本の特定の存在形態としてそれぞれ固有な資本機能を発揮するということを少しも解消しない⁽⁴⁾。ところで、従来生産過程での資本の固有な機能的存在形態である生産資本とりわけその不変資本成分が一体如何なる具体的形態で剰余価値形成に参加するのかという基本論点に関して必ずしも立ち入った本格的考察が提示されていないように思われる。もし生産資本中の不変資本成分が剰余価値形成に参加する具体的仕方に関して考察が深められることがないならば、剰余価値生産や不変資本の価値移転の仕方に関するマルクスの独創的理論に内在する一つの要点がドロップしてしまうことに結果するばかりか、ひいては剰余価値が生産資本中の不変資本成分からも可変資本成分からも均等に発生するとみる呪物崇拜の謎を解く鍵を失うことになる。従って、以下の考察では、生産資本とりわけその不変資本部分が剰余価値形成に参加する具体的仕方を理論的に確定する。

周知の通り、マルクスは、『資本論』第Ⅰ巻第三篇第五章「労働過程と価値増殖過程」で即自的に剰余価値を生む資本として存在する貨幣が一体如何にして生産過程において剰余価値を産出することによって資本としての内的本性を実証するのかを厳密に証明した。つまり、マルクスは、第五章の第一節「労働過程」においてさしづめ価値増殖過程が即自的に含まれる労働過程を人間と自然との超歴史的な物質代謝過程として考察した上で、更に一步踏みこみ第二節「価値増殖過程」において労働日が賃金等価を再生産する点を越えて延長される観点から労働過程を理論的に抽象すればそれは同時に特殊歴史的な価値増殖過程を形成することを究明したのである。そこで、人々は通常資本の生産過程が

労働過程という超歴史的契機と価値増殖過程という特殊歴史的契機との機械的総計によって成り立つという固定観念に立って、生産資本中の不変資本成分は具体的有用労働と抽象的人間労働との二重の凝固物として生産過程で機能すると観念しがちな傾向をもつ。また、人は、商品が使用価値と価値との直接的統一物であることの単純な類推からも、機械や原料からなる生産資本中の不変資本要素は生産過程において具体的有用労働と抽象的人間労働との二重の凝固物として機能すると考える弊害に陥りがちである。われわれの見解によれば、生産資本中の不変資本成分が生産過程で具体的有用労働と抽象的人間労働との二重の凝固物として機能するという特有の考え方は、資本の生産過程が具体的有用労働の支出過程である労働過程と抽象的人間労働の支出過程である価値増殖過程とから成り立つという独自の見方と軌を一にする。しかし、生産資本中の不変資本成分が生産過程で具体的有用労働と抽象的人間労働の二重の凝固物として機能するという考え方は、資本の生産過程が具体的有用労働と抽象的人間労働との二重の支出過程から成り立つという考え方と同様に、剰余価値生産に関するマルクスの独創的理論から離反した手前勝手な独断にすぎない。そこで、以下では、先ず資本の生産過程がそれ自体としては唯一の現実的労働としての具体的有用労働の支出過程から成り立つにすぎないことを考察の出発点にすえて、生産資本中の不変資本成分は生産過程において単に超歴史的な使用価値または具体的有用労働の凝固物としてのみ存在することを考察する。資本の生産過程はそれ自体としては具体的有用労働の支出過程をなし、そこでは不変資本成分が単に具体的有用労働の凝固物としてのみ存在するにすぎないという以下の考察によって、同時に具体的有用労働が不変資本の価値転移を媒介する具体的な仕方が明確化するであろう。

マルクスの教えるところによれば、労働力の合目的な発揮によって支出される唯一の現実的労働は、商品の超歴史的な構成要素である使用価値に結実する具体的有用労働であるにすぎない。「現実的労働は、ある使用価値を作りだすための、特定の諸欲望にかなったある仕方、ある自然素材をわが物とするための、合目的な活動である。」 (*Zur Kritik der Politischen Ökonomie*

[*Manuskript* 1861—1863]., Teil 1, S. 48) 従って、労働の唯一の現実的姿態が使用価値に結実する具体的有用労働だということは、価値実体をなす抽象的人間労働が市場で相対する対象化された相異なる具体的有用労働の等置関係のうちのみその相異なる労働の具体的有用形態を客観的に捨象されて成り立つということの意味する。実際、マルクスが『資本論』第Ⅰ巻第一篇第一章第一節「商品の二つの要因 使用価値と価値」で価値の唯一の構成要素としての抽象的人間労働を取りだす際、市場で相対する二種類の対象化された具体的有用労働そのものから抽象的人間労働を析出したのは、抽象的人間労働が対象化された相異なる具体的有用労働の市場での等置関係のうち具体的に有用労働そのものを母胎として成り立つにすぎないからである⁽²⁾。逆にいえば、抽象的人間労働は市場で相対する対象化された具体的有用労働を母胎とするその抽象的形態であるがゆえに、労働はただ特定の有用な形態で対象化された場合にのみ価値を形成するのである。

「価値を形成するためには労働は有用な形態で支出されなければならない。」
(*Kapital*, I, S. 208, 圏点一頭川)

「労働者はそれぞれどのようにして労働時間を、したがってまた価値をつけ加えるのか？ いつでもただ彼の特有な生産的労働様式の形態でそうするだけである。紡績工はただ紡ぐことによってのみ、織物工はただ織ることによってのみ、鍛冶工はただ鍛えることによってのみ、労働時間をつけ加えるのである。」
(*Ibid.*, I, S. 214—5, 圏点一頭川)

ところが、抽象的人間労働が対象的形態にある相異なる具体的有用労働の市場での客観的等置関係のうちのみ抽象的に成り立つにすぎないとすれば、超歴史的な商品の構成要素たる使用価値に結実する具体的有用労働こそが生産過程での労働の唯一の支出形態であるということになる。つまり、労働生産物の独自に社会的な形態である商品にはあらかじめ二種類の相異なる労働が対象化されているのではないのと同じように、生産過程では具体的有用労働と抽象的人間労働とが同時平行的に支出されるのではないことになる。「労働者は同じ時間に二重に労働するのではない」(*Kapital*, I, S. 214) という周知の一

文は、生産過程での具体的有用労働と抽象的人間労働との同時平行的支出を否定したマルクスの真意を端的に表明したものにほかならない。従って、使用価値に結実する具体的有用労働こそが生産過程での労働の唯一の形態であるとするならば、一労働日を構成する必要労働時間と剰余労働時間とは具体的有用労働の継続時間によって成り立つことになる。つまり、生産過程において可変資本の存在形態としての労働力はその合目的な消費によって単純に使用価値に結実する或る具体的有用労働を一労働日分だけ支出する。そして、生産過程で一労働日分だけ支出され対象化された或る具体的有用労働は、市場において別種の具体的有用労働との等置関係のうちに、剰余価値をその一可除部分として含む抽象的人間労働に還元されることになるのである。従って、必要労働といひ剰余労働といっても、両者は紡績労働や織布労働という具体的有用労働としてのみ生産過程において支出されるにすぎない。次のマルクスの一文は、必要労働と剰余労働とがともにそれ自体としては具体的有用労働としてのみ支出されるということの最も雄弁な表明である。

「剰余労働は、もちろん、必要労働と同じ種類の労働から成っている。労働者が紡績工であるなら、彼の剰余労働は紡ぎのかたちで、また彼の剰余生産物は紡糸のかたちで存在する。」(Zur Kritik der Politischen Ökonomie [Manuskript 1861—1863]., Teil 1, S. 209)

それだから、生産過程で対象化される必要労働と剰余労働とがともにそれ自体としては具体的有用労働として支出されるとすれば、資本の生産過程はそれ自体ただ単に使用価値を生産する労働過程としてのみ進展するにすぎないということになる。それゆえに、労働過程と価値増殖過程とは、実は資本主義的生産のもとで行なわれる労働過程そのものの相異なる二面にほかならない。資本主義のもとでの労働過程は、一方でそれを人間と自然との物質代謝の行なわれる具体的有用労働の支出過程とみられるかぎりでは超歴史的な労働過程をなすが、他方でそれを必要労働と剰余労働との支出過程とみるかぎりでは特殊歴史的な価値増殖過程をなすのである。価値増殖過程とは、人間と自然との物質代謝過程とみるかぎり超歴史的な労働過程という単一の過程を一步突っこんで必

要労働と剰余労働との支出過程として理論上抽象化して把握したものすぎない。

「われわれが生産過程を二つの違った観点から、(1)労働過程として、(2)価値増殖過程として、考察するとき、そこにはすでに、この生産過程はただ単一な不可分な労働過程でしかない、ということがある。」(*Resultate des unmittelbaren Produktionsprozesses*, S. 467, 『直接的生産過程の諸結果』国民文庫, 34—5 ページ, 圏点—マルクス)。

かくて、これまでの考察によって、資本の生産過程はそれ自体としては使用価値に結実する具体的有用労働の支出過程をなし、具体的有用労働と抽象的人間労働との二重的な支出過程をなさないことが明らかになった。ところが、これまでの考察を更に一步突っこんでいえば、資本の生産過程での労働力の生産的発揮が超歴史的にして唯一の現実的労働である具体的有用労働の支出をなすのと丁度同じように、機械や原料などの不変資本成分は生産過程において抽象的人間労働の物質化された定在としては存在せず、単純に具体的有用労働の物質化された特定の使用価値としてしか労働力と接触しないのである。つまり、生産資本中の不変資本成分は生産過程の内部においては具体的有用労働を表わす特定の使用価値としてのみ実在し、具体的有用労働と抽象的人間労働との二重の凝固物としては機能しないのである。というのも、唯一の現実的労働としての或る具体的有用労働が特殊歴史的な範疇としての抽象的人間労働に客観的に還元されるのは、それが物質化した形態で別種の具体的有用労働と市場で等置関係におかれ両者のもつ労働の具体的有用形態が捨象されるかぎりでのことであるからにはかならない。生産過程そのものは商品交換が行なわれる市場のように対象された具体的有用労働から客観的に労働の具体的有用形態を捨象する社会的関連をもたないがゆえに、不変資本成分は生産過程において単に具体的有用労働の結実した特定の使用価値としてのみ存在して労働力と接触するのである。実際、資本の生産過程で労働力の使用が具体的有用労働として実現されるのは、不変資本成分が特定の使用価値をもつ定在として労働力を合目的に消費するからでしかないのである。けだし、労働力の生産的支出は生産手

段のもつ特定の使用価値によって根本的に規定されているからである。以下のいくつかの引用文は、不変資本成分が資本の生産過程では単純に具体的有用労働の凝固物としてのみ機能するという事柄に関するマルクス自身の卒直な表明をなす。

「資本の生産過程は、資本の生産過程として現れずに、生産過程そのものとして現れ、また労働と区別された形では、資本は、ただ原材料と労働用具という素材の規定性でだけ現れる。」(Graudrisse, II, S. 210, 圏点—マルクス)「現実の労働過程そのものの内部では、諸商品はただ使用価値として現存するのであり、交換価値として現存するのではない。」(Zur Kritik der Politischen Ökonomie [Manuskript 1861—1863]., Teil 1, S. 51)

因みに、資本の生産過程では不変資本成分は特定の使用価値をもつ定在として労働力と接触することによって剰余労働を含む一定の具体的有用労働の支出を可能ならしめる媒体としての役割を果たし、もって剰余価値形成に固有な仕方に参加するのである。つまり、生産手段が生産過程でその価値量を変えないのに不変資本と概念規定される所以は、超歴史的な使用価値としてのみ存在する生産手段が必要労働と剰余労働とを含む一定量の具体的有用労働を吸収する物質的媒体として剰余労働の吸収に際して決定的役割を演じるからである。

「現実の生産過程では労働の対象的な諸条件—労働材料と労働手段—は、ただ単に、生きている労働が対象化されるということに役立つだけではなくて、可変資本に含まれていたよりも多くの労働が対象化されるということに役立つ。すなわち、それは、剰余価値(および剰余生産物)となって現われる剰余労働の吸収手段および搾取手段として役立つのである。」(Resultate, S. 264, 『直接的生産過程の諸結果』, 77ページ, 圏点—マルクス)

それだから、生産過程で剰余価値が産出されるのは、不変資本成分が単純に具体的有用労働の物質化した特定の使用価値としてのみ存在して購買された労働力を一定の時間にわたって合目的に消費するからでしかないのである⁽³⁾。

ところで、われわれは、これまでに、 $C+V+M$ からなる商品の価値構成のうちの付加価値($V+M$)部分が創造される仕方を特に不変資本成分の具体

的存在様式との関連で考察してきたが、更に議論を進めていけば、不変資本の価値移転が生きた具体的有用労働によって媒介されるという事情は、実は不変資本が生産過程では単純に具体的有用労働の結実した特定の使用価値としてのみ機能するという事柄によって合理的な説明がつくのである。すなわち、マルクスは、生産過程において同時に行なわれる旧価値移転と新価値創造とを同一労働の二面的作用と明確に規定した⁽⁴⁾が、すでに考察した通り、旧価値移転と新価値創造という二面的作用を果たす同じ労働とは、唯一の現実的労働として超歴史的に実在する具体的有用労働のことにほかならない。そこで、生産過程において流動化させられる唯一の現実的労働としての具体的有用労働の支出に関して極力注目すべきは、労働力が特定の使用価値をもつ定在としてのみ実在する不変資本成分との接触によってのみ合目的に消費されるというところにある。つまり、労働力の生産的発揮は労働力が特定の使用価値としてのみ機能する不変資本成分との接触を通じてだけ具体的有用労働の支出として実現されるのだから、労働力の合目的な消費による具体的有用労働の支出は、単に新生産物へのその対象化を伴うのみならず、同時に不変資本成分の存在形態である生産手段という特定の使用価値の消費を必然的に伴うのである。いうまでもなく、具体的有用労働の支出が生産手段のもつ特定の使用価値の消費を随伴するということは、生きた具体的有用労働の支出が同時に特定の使用価値に結実した過去の具体的有用労働を事実上消費して新生産物の形成要素たらしめるということの意味する。それゆえに、生きた具体的有用労働が不変資本の価値移転を媒介するのは、不変資本が生産過程では単純に具体的有用労働の結実した特定の使用価値としてのみ実在してそれが生きた具体的有用労働によって合目的に消費されるからにほかならない。因みに、新生産物に移し替えられた過去の或る具体的有用労働は、新たに対象化された具体的有用労働と同様に、市場において別種の対象的形態にある具体的有用労働との等置関係のうちに客観的に抽象的人間労働に還元され新生産物の価値の一部分を構成するものとしてあらわれるのである。それだから、総じていえば、生きた具体的有用労働による不変資本の価値移転は、不変資本が生産過程では具体的有用労働の結実した

特定の使用価値としてのみ実在するにすぎないという事情によって合理的に説明できるのである。

以上、われわれは、本節において、生産資本中の不変資本成分が生産過程では単純に具体的有用労働の結実した特定の使用価値としてのみ存在してなおかつ剰余労働を吸収する物質的媒体として機能することを明らかにした。

- (1) 可変資本の価値増殖分としての剰余価値は、資本主義的生産の総過程上において、前貸総資本の各成分から一様に発生する産物として利潤というより高次の転化形態を受けとるが、とりわけ剰余価値が貨幣資本へ再転化すべき商品資本からも発生する果実としてあらわれる本質的な理由は、商品資本が生産過程完了時点では未だ商品形態にしかない剰余価値を貨幣形態に転化させるという固有な資本機能を果たす点にある。従って、一步突っこんでいえば、商品価格の価値以上への吊り上げによる販売などの流過程に付随する諸事情は、剰余価値が商品資本からも生じるという現象形態を更に一層強める増幅要因でしかない。それだから、現行版『資本論』第Ⅲ巻第一篇第二章「利潤率」でのべられている価格の吊り上げなどの流過程に付随する諸事情をもって剰余価値が商品資本成分からも発生する果実としてあらわれる基本的理由に置き換えてはならない。

「生産過程で生みだされた剰余価値は流過程ではじめて実現されるので、資本家は剰余価値を、労働者の搾取から、直接的生産過程から、ではなくて流過程から、彼の商品からひきだすのだ、という仮象が生じる。……この仮象は次の事情によってさらに強められる。すなわち、個々の資本家等々は、時によって変動する市場の状態によって、また、その平均的な状態を前提したとしても、買い手のずるさがまさるか、あるいは売り手のずるさがまさるかのかいかにによって、商品はその価値以上であるいは価値以下で売られ、一方が他方を欺す（不当な利益を得る）という事情である。」（『資本の流過程』大月書店、中峯照悦・大谷禎之介他訳、62—3ページ、圈点—マルクス）

- (2) スミスやリカードに代表される古典派の価値概念とマルクスの価値概念との最も本質的な相違は、古典派が労働の二重性を超歴史的にして機械的な区別として事実上認識したにとどまったのに反して、マルクスの場合抽象的人間労働を対象化された相異なる具体的有用労働の市場での等置関係のうちのみ客観的に成り立つ特殊歴史的な範疇として措定したところにある。古典派の価値概念とマルクスの価値概念との最も基底の相違については、拙稿「古典派の価値概念とマルクスの価値概念」（『高知大学学術研究報告（社会科学）』第29巻、1980年）を参照されたい。
- (3) 周知の通り、生産資本中の可変資本成分である労働力は、不変資本成分である生産手段とは異なってそれ自体物質的財貨ではないから、市場では具体的有用労働の凝固

物として抽象的人間労働に還元されることはない。それだからこそ、労働力商品の価値は、労働力を再生産するために要する生活手段の価値によって間接的に規定されるのである。従って、可変資本成分である労働力は、不変資本成分である生産手段とは根本的に性格が異なる。それゆえに、議論を先回りしていえば、マルクスが同じ生産資本という範疇を $G - \dot{W} < \frac{A}{P_m}$ と生産過程を現実的に開始する $\dot{P} \cdots W'$ とに区別して二重表示した理由如何は、本質的に流通過程と生産過程とにおける生産資本中の不変資本成分の定在様式の相違にのみかわる。

- (4) 「労働の単に量的な付加によって新たな価値がつけ加えられ、つけ加えられる労働の質によって生産手段の元の価値が生産物のうちに保存される。このような、労働の二面的な性格から生ずる同じ労働の二面的作用は、いろいろな現象のうちにはっきり現われる。」(Kapital, I, S. 216, 圏点一頭川)

三 生産資本の二重表示の理論的根拠

われわれは、前節において、マルクスが資本の循環範式 $G - W < \frac{A}{P_m} \cdots P \cdots W' - G'$ で同じ生産資本という範疇を $\dot{W} < \frac{A}{P_m}$ と生産過程を現実的に開始する \dot{P} とに区別して二重に表現した真の理由を解明する布石として、生産資本中の不変資本成分に着目し、不変資本は生産過程上では単純に具体的有用労働の凝固物として剰余価値形成に加わることを分析した。従って、本節の課題は、前節での考察を論理的基礎にすえて、資本の循環範式 $G - W < \frac{A}{P_m} \cdots P \cdots W' - G'$ では何故に同じ生産資本という範疇が $\dot{W} < \frac{A}{P_m}$ と生産過程を現実的に開始する \dot{P} として概念的に区別して表現されねばならないのかを最終的に謎解きすることにある。

前節で考察したように、資本の生産過程では生産資本中の不変資本成分は、単純に具体的有用労働の結実した特定の使用価値としてのみ機能するにすぎず、具体的有用労働と抽象的人間労働との二重の凝固物としては存在しない。ところが、不変資本としての機械や原料は商品市場において貨幣資本の直接的転化形態として調達されたものである。いうまでもなく、商品市場で購買された生産資本 $W(P_m)$ も生産過程で現実的に剰余価値生産に参加する生産資本 $P(P_m)$ も具体的有用労働の結実した特定の使用価値であるという点においては

まったく同一である。従って、同じ生産資本という概念規定をもつ $W(P_m)$ も $P(P_m)$ もともにその現物形態または使用価値の面では少しも区別がない。しかし、同じ生産資本という範疇である $G - \dot{W} < \frac{A}{P_m}$ と $\dot{P} \dots W'$ との間の本質的区別は、生産資本中の不変資本成分が価値または抽象的人間労働の凝固物としてそれぞれが客観的に実在するか否かという点において生じるのである。つまり、生産資本の一構成要素としての不変資本成分は商品市場で売買されようと生産過程で現実的に機能を始めようとその現物形態には何の相違も存在しないが、それにもかかわらず、商品市場で調達される不変資本成分はそれが商品として売買されるかぎりでは単に具体的有用労働の結実した特定の使用価値または現物形態にあるだけではなく更に抽象的人間労働の凝固物としても実在する。けだし、生産資本中の不変資本成分 (P_m) が商品として市場で売買されるということは、生産手段に対象化された唯一の現実的労働としての或る具体的有用労働が別種の対象化された具体的有用労働との客観的な等置関係の中で抽象的人間労働の物質化された定在としてあらわれることと同じであるからである。従って、貨幣資本の直接的転化形態としての生産資本中の不変資本と現実的に剰余価値生産に参加し始める不変資本との本質的差別性は、前者が流過程上で具体的有用労働と抽象的人間労働との二重の凝固物として実在するのに反して、後者が生産過程上で単純に具体的有用労働の凝固物としてしか機能しない点にある。マルクスは「貨幣が貨幣の形態で存在するときには、それが生産資本に転化されるさいにそれと交換される構成諸成分は、それにたいして商品として相対する」(*Zur Kritik der Politische Ökonomie* [Manuskript 1861—1863], Teil 1, S. 91) とのべているが、ある意味では自明にみえるマルクスの一文は不変資本成分が商品として売買される際には具体的有用労働と抽象的人間労働との二重の凝固物として客観的に機能するという固有な事情を生産過程での不変資本成分の事情との対比において強調したものとして読まれるべきであるように思われる。それゆえに、貨幣資本の直接的転化形態としての生産資本中の不変資本と生産過程を現実的に開始する生産資本中の不変資本とは、具体的有用労働の凝固物として機能する点では完全に同じであるが、抽象的人間労働

の物質化された定在として客観的に実在するか否かという点では決定的に相異なるのである。それだから、貨幣資本の直接的転化形態としての不変資本 (P_m) と生産過程を現実的に開始する不変資本とは抽象的人間労働の凝固物として客観的に実在するか否かという点で本質的な相違をもつとするならば、資本の循環範式において貨幣資本が流過程で直接的に転化する不変資本と生産過程を現実的に開始する不変資本とを区別して二重に表現する理論上の必要性が生じることになる。なぜならば、流過程での貨幣資本の直接的転化形態としての不変資本と生産過程を開始する不変資本とを両者が同じ生産資本という概念規定を受けるとその一成分であることから区別して二重に表現しないならば ($G-W < \overset{A}{P}_m \dots W' - G'$)、概念上不変資本は具体的有用労働の結実した特定の使用価値としてのみならず、抽象的人間労働の凝固物としても生産過程において固有な機能を果たすという不条理に陥ることになるからである。もし不変資本が具体的有用労働と抽象的人間労働との二重の凝固物として剰余価値生産に参加するとすれば、不変資本が単純に特定の使用価値をもつ素材的な姿態でのみ剰余価値生産に加わるというマルクス自身の考え方と根本的に抵触することになる。因みに、 $W < \overset{A}{P}_m \dots P \dots W'$ 全部を生産過程とみなすローゼンベルグは自己の考え方に忠実に従って「生産資本すなわち $\dot{W} < \overset{A}{P}_m$ は生産的に消費されなければならない」(『資本論注解』3, 71ページ, 圈点一頭川)とのべているが、貨幣資本の直接的転化形態である生産資本中の不変資本が具体的有用労働と抽象的人間労働との二重の凝固物として生産過程で機能すると事実上主張するローゼンベルグの見解は、流過程での不変資本と生産過程を開始する不変資本との間に横たわる本質的区別に関する認識に欠け、剰余価値生産に関するマルクスの理論と整合しない。貨幣資本の直接的転化形態としての不変資本成分が具体的有用労働と抽象的人間労働との二重の凝固物として剰余価値生産に参加するというならば、不変資本成分は抽象的人間労働の物質化された定在として生産過程で如何に機能するのかに関して積極的な証明が必要である。

従って、貨幣資本の転化形態である生産資本 $W < \overset{A}{P}_m$ と生産過程を開始する

生産資本 P との間を介在する点線 $W < \overset{A}{P}_m \dots P$ は、生産資本 P の商品資本 W' への実質的変態を表現する点線 $P \dots W'$ と異なって、単に $W < \overset{A}{P}_m$ と P とにそれぞれ含まれる不変資本成分の定在様式上の区別を表現するものにすぎない。まさしく「 W' から P への再転化は流通部面で行なわれる」(*Kapital*, II, S. 78) のは、具体的有用労働の結実した特定の使用価値として生産過程にはいる不変資本成分が貨幣資本の直接的転化形態である $W (P_m)$ の生産過程上での単なる再存在でしかないからである。また、マルクスが点線をもって流通過程の中断を表わす記号として抽象的に規定した所以は、同じ点線でも $P \dots W'$ が資本の実質的変態を表わすのに対して $W < \overset{A}{P}_m \dots P$ が単純に $W < \overset{A}{P}_m$ のうちの不変資本 (P_m) と P のうちの不変資本 (P_m) との定在様式上の相違を表現するだけの意味しかもたないところにある。ところで、資本の循環範式において貨幣資本の直接的転化形態としての不変資本と生産過程を開始する不変資本とは抽象的人間労働の凝固物として実在するか否かという点で相異なるから不変資本を含む生産資本を $W < \overset{A}{P}_m$ と P とに区分して二重に表現すべき必然性があるというわれわれの見解に従えば、生産過程上での生産資本の直接的転化形態である商品資本と流通過程上で貨幣資本へと転化する商品資本とを区別して二重に表現すべきことになるのではないかという疑問を人はわれわれに対して提起するにちがいない。しかし、生産過程上での生産資本の転化形態である商品資本と流通過程上で変態をとげる商品資本とを資本の循環範式において区別して二重表示すべき理由は全然存在しないのである。なぜならば、生産資本 P の転化形態としての商品資本 W' は、それが何らかの種類の欲望を満たす使用価値として完成しているかぎりでは、概念上同時に流通過程にあって具体的有用労働と抽象的人間労働との二重の凝固物として存在することになるからである。換言すれば、マルクスが同じ生産資本を資本の循環範式において $W < \overset{A}{P}_m$ と P とに区別して二重表示したのは、貨幣資本の直接的転化形態である不変資本 $W (P_m)$ と生産過程を開始する不変資本 $P (P_m)$ とがそれぞれ抽象的人間労働の凝固物として存在するか否かという一点において相異なるからであって、両者が空間的に違った位置に存在するからでは全然ないからである。従って、生産資本の転

化形態としての商品資本 W' は、それが使用価値として完成しているかぎり商品として販売可能な抽象的・人間労働の物質化された定在として存在するがゆえに、資本の循環範式において貨幣資本へと転化する商品資本と区別して二重表示すべき理論的必要性は少しも存在しないのである。

「使用価値として完成していて販売可能な状態にある商品は、商品として市場にあり、流通段階にある。すべての商品は、その第一の変態、すなわち貨幣への転化を経なければならぬかぎり、流通段階にある。」(Mehrwert, III, S. 277)

「商品資本としての商品資本は、商品資本として機能しはじめるとき、それは市場にある。」(『資本の流過程』, 大月書店, 中峯照税・大谷禎之介他訳, 65ページ, 圏点—マルクス)

かくして、われわれは、これまでの展開において、マルクスが同じ生産資本という範疇を $G-W < \frac{A}{P_m}$ の $\dot{W} < \frac{A}{P_m}$ と生産過程を開始する生産資本としての \dot{P} とに区別して $G-\dot{W} < \frac{A}{P_m} \dots \dot{P} \dots W'-G'$ のように二重表現した真の理由を解き明かしたが、以上でのべたわれわれの積極的見解からすれば、資本の循環範式が何故に $G-W = P \dots W'-G'$ あるいは $G-W(P) \dots W'-G'$ として表現されてはならないのかというごくプリミティブな疑問はおのずから氷解するように思われる。すなわち、先ず $G-W = P \dots W'-G'$ という資本の循環過程に関する表現形態についていえば、それは、生産資本が具体的有用労働と抽象的・人間労働との二重の凝固物として生産過程で機能するという客観的な事実と反する事柄を表現することになる。また、資本の循環範式を $G-W(P) \dots W'-G'$ として表現しても同じ問題が生じるのである。 $G-W(P) \dots W'-G'$ という資本の循環過程に関する表現形態では、生産資本中の不変資本成分は、単に具体的有用労働の結実した特定の使用価値としてのみ生産過程で機能するのに反して、抽象的・人間労働の凝固物としても客観的に機能するという間違った事実が表現されることになるからである。

ところで、従来学界の一部には $P \dots W'$ だけを生産過程となすマルクスの規定の存在を承認した上でなおかつそれを理解困難として排除してそのアンチ

・テーゼとして $W < \overset{A}{P}_m \cdots P \cdots W'$ 全体を生産過程と規定すべきであるという潮流がある。たとえば、日高普氏は、マルクスが資本の循環範式において同じ生産資本という範疇を $G - W < \overset{A}{P}_m$ の $\dot{W} < \overset{A}{P}_m$ と生産過程を現実的に開始する $P \cdots W'$ の \dot{P} とに区別して二重に表現したことにシャープな疑問を提起されたが、しかし、思案の挙句、 $G - W < \overset{A}{P}_m$ の $\dot{W} < \overset{A}{P}_m$ と $P \cdots W'$ の \dot{P} との同一性を主張することによって生産資本の商品資本への実質的変態過程を $\dot{W} < \overset{A}{P}_m$ の W' への転化として規定すべきであるとマルクスに批判の矢を放たれる⁽¹⁾。しかし、先ず第一に、『「…」はそれがどんな内容をもっているにせよ、必ず時間の経過をとまなうことを表現する』（日高普『資本の流過程』41ページ）という日高氏の見解には、確固たる説得力をもつ根拠が存在しないように思われる。というのも、流過程とは概念上本質的には売り手から買い手への商品所有権の移転そのものに帰着するから、直接的に流過程を意味する実線（ $G - W < \overset{A}{P}_m$ または $W' - G'$ ）は必ずしもそれ自体として時間的経過を表現しないからである。また、マルクス自身、点線（ $W < \overset{A}{P}_m \cdots P \cdots W'$ ）は流過程の中断を表わすと規定しているが、流過程の中断という事柄そのものは資本の或る存在形態から資本の別の存在形態への変態に要する時間的経過を少しも含蓄していないのである。従って、点線が資本の或る変化に要する時間的経過を表現するという主張は日高氏がみずから植えつけた単なる固定観念にすぎない。第二に、 $W < \overset{A}{P}_m \cdots P \cdots W'$ 全体を生産過程とみなす日高氏の見解の根本欠陥は、商品として購買された生産手段が生産過程において具体的有用労働と抽象的人間労働との二重の凝固物として剰余価値生産に参加すると理解する点にある。因みに、生産資本中の不変資本成分が二重的な労働の凝固物として生産過程に参加すると日高氏がお考えであることは、不変資本の価値移転が抽象的人間労働によって媒介されるという固有な主張にうかがわれる。

「具体的有用労働は、労働の種類によってまったく異なったものであるから、ただ生産手段という有用物を消費し、新しい生産物という有用物をつくりだしたにとどまるものであって、生産手段に対象化された抽象的人間労働を移転させるようなものではない。移転させるものは、抽象的人間労働と考えるより

ほかにあるまい。したがって抽象的人間労働は、労働を移転させることと、労働を附加することを同時におこなうのであり、もっと正確には、労働を移転させることによって労働を附加するのである。」（日高普『経済原論』時潮社、1959年、62—3ページ）

みられるように、 $W < \frac{A}{P_m} \cdots P \cdots W'$ 全部を生産過程とみなす見解は、その主張者が明確に意識するか否かに関係なく、生産資本中の不変資本成分が具体的有用労働と抽象的人間労働との二重の凝固物として生産過程にはいりこむという原理的な考え方の論理必然的な帰結にほかならない。いうまでもなく、生産資本中の不変資本成分が二重的な労働の凝固物として生産過程にはいりこむという考え方は、生きた労働がそのままの形態で抽象的人間労働という一面をもつという抽象的人間労働＝超歴史的範疇説に起因する。けだし、生きた労働が本来的に抽象的人間労働という一面をもつという考え方に立脚すれば、生産資本中の不変資本成分は生産過程において抽象的人間労働の凝固物としても存在することになり、生産資本の商品資本への実質的変態を $W < \frac{A}{P_m}$ の W' への転化と規定しなければ首尾一貫性が損われる事態に陥ることになるからである。日高氏の次の一文は生産資本中の不変資本成分が二重的労働の凝固物としてそのまま生産過程にはいりこむという発想の卒直な表明文として読まれるべきである。

「いったい生産資本とは何か。マルクスもこれまで生産資本 P を、生産要素としての資本と考えてきた。そうすると W と P は同じものとなり、 $W \cdots P$ と表記するばあいの『 \cdots 』は何のことかわからなくなると前にのべた。」（日高普『資本の流通過程』182ページ）

しかし、先ず第一に、不変資本の価値移転の仕方に関していえば、日高氏には生きた労働が直接的に生産手段に対象化された抽象的人間労働そのものに働きかけることによって、不変資本の価値が新生産物に移転すると考える取り違えがある。そもそも不変資本の価値移転の説明に際してマルクスは生きた労働の働きかけの対象が生産手段に凝固した抽象的人間労働であるとはどこにおいてものべていない。むしろ不変資本の価値の説明に際してマルクスが明言した

のは、不変資本の価値移転が生きた労働による生産手段そのものの合目的な消費を媒介して行なわれるという一点にある。「労働は、生産手段を現実合目的に生産手段として消費するかぎり、つねに生産手段の価値を生産物に移すのである。」(Kapital, II, S. 126)つまり、不変資本の価値移転に関するマルクスの説明に忠実に従えば、具体的有用労働の結実した生産手段の特定の使用価値こそが生きた労働の働きかける直接的対象をなし、生産手段が特定の使用価値として合目的に消費されて新生産物の形成要素としてはいりこむことによって、抽象的人間労働の母胎としての過去の具体的有用労働が新生産物に移転するのである⁽²⁾。従って、生きた労働が生産手段に対象化された抽象的人間労働に直接働きかけることはないとするれば、生産手段は単純に具体的有用労働の産物としてのみ剰余価値形成に参加することになる。それだから、生きた具体的有用労働は単に生産手段という有用物を消費するにすぎないという日高氏の考え方では、生産手段が抽象的人間労働の凝固物としても存在するという取り違えによって、生きた具体的有用労働による生産手段の特定の使用価値の合目的な消費それ自体が抽象的人間労働の母胎である具体的有用労働の移転を内包していることが看過されているのである。従って、むしろ日高氏が積極的にこたえるべきは、生きた具体的有用労働による生産手段のもつ特定の使用価値の合目的な消費が何故に不変資本成分の価値移転を媒介することにならないのかという点にある。いうまでもなく、生きた具体的有用労働が生産手段の合目的な消費によって不変資本の価値移転を媒介するとみれない主要な原因は、日高氏が抽象的人間労働を生きた労働そのものの本来的な一面とみなし生産手段をもって二重的な労働の凝固物と発想する根本的な理念にある。しかし、労働力の生産的発揮が超歴史的に具体的有用労働と抽象的人間労働との二面の支出から成り立つとするならば、両者は概念上同一労働のもつ二重性には全然ならないことに極力注意されるべきである。なぜならば、本来的に二重的な労働が機械的に区別されたままでおかつ両者が同一労働のもつ相異なる二面であると主張される場合、同一労働の概念の中味は単に二重的労働が労働力の生産的発揮において同時平行的に支出されるということにすぎず、二重的労働

働は少しも同一労働に帰着しないからである。「商品のなかに、正直にいうて、二種類の労働が存在するのではないが、それでもなお、商品のなかで同じ労働がそれ自身に対して対立的になっている。」(*Le Capital, Paris, Editeurs, Maurice Lachatre et Cei, 1872—75, P. 18*) 日高氏はいみじくも「労働が二つあるわけではないが、同一の労働が……具体的有用労働と抽象的人間労働との二つの面をもつ」(『経済原論』61ページ)と主張されるが、具体的有用労働と抽象的人間労働とが同一労働の相異なる二面であるとすれば、二重的労働が本来帰着する同一労働とは一体何かが概念上厳密に規定されるべきである。従って、具体的有用労働と抽象的人間労働とが同一労働そのものの二重性であるというならば、商品の超歴史的な要素である使用価値に結実する具体的有用労働こそ相異なる使用価値が商品として市場で交換される際にそこから抽象的人間労働の分出するその本来の母胎であるという合理的帰結を導出しなければ首尾一貫しないのである。そして、具体的有用労働こそが諸商品の交換関係においてそこから抽象的人間労働の分出する本来の母胎であることを認めるならば、流過程とは違って生産過程においては生産資本中の不変資本成分は単純に具体的有用労働の凝固物としてしか存在しないことになり、貨幣資本の直接的転化形態としての生産資本 $W < \overset{A}{P}_m$ と生産過程を現実的に開始する生産資本 P とを区別して二重表示すべき必要性が生じることになるのである。従って、 $W < \overset{A}{P}_m \cdots P \cdots W'$ 全体を生産資本の商品資本への実質的な変態過程とみならず見解の究極的な踏きの石は、生きた労働が超歴史的に抽象的人間労働という一面をもつという根本的な取り違えにある。かくて、 $W < \overset{A}{P}_m \cdots P \cdots W'$ 全体を資本の実質的な変態過程とみならず見解は、不変資本成分が生産過程において抽象的人間労働の凝固物として機能するとみる点で根底から成り立たないのである。

以上、われわれは、本節において、マルクスが $G - W < \overset{A}{P}_m$ をもって貨幣資本の生産資本への転化と規定する一方で $P \cdots W'$ 部分だけを生産資本の商品資本への実質的な変態過程と規定した真の理由を解決した。

- (1) 日高普『資本の流通過程』40—43ページ。
- (2) 不変資本の価値移転が生産手段のもつ特定の使用価値を合目的に消費する具体的有用労働によって媒介されることは、マルクスにとってすでに『経済学批判要綱』において解決済みの事柄であった。

「労働者は材料と用具を維持する—それらのものは生きた労働とふたび接触し、用具と材料として利用されるという、まさにそのことによって維持される。」(Grundrisse, II, S. 263)

「原料と用具にふくまれている労働時間が同時に維持されるのは、労働の量の結果ではなく、労働一般としての労働の質の結果である。」(Ibid., II, S. 265, 圈点—マルクス)

ところが、ロズドルスキーは、「労働一般としての労働の質」という文言に固執して、『経済学批判要綱』執筆当時マルクスが不変資本の価値移転をもって抽象的人間労働の固有な作用として考えていたと解釈するのである。

「『経済学批判要綱』と『資本論』との一頭川) 両方の叙述の比較からわかることは、なぜマルクスがその最初の定式化を修正しなければならなかったか、ということである。『労働一般』としてのその抽象的な性格においては、まさしくその労働は、価値創造的な労働を表わし、単に量的な区別が可能であるものにほかならない。だから、それを同じように価値保存の説明に関係させるということではできない。」(R. ロズドルスキー『資本論成立史』2, 法大出版局, 時永淑・小黑佐和子・嶋田力夫共訳, 328—9ページ)

しかし、『経済学批判要綱』から『資本論』にかけて不変資本の価値移転の媒介者が抽象的人間労働から具体的有用労働へと根本的修正を受けたというロズドルスキーの主張は、『経済学批判要綱』での「労働一般」を短絡的に抽象的人間労働と等置する取り違えに起因する点で肯綮に当たっていない。というのも、第一に、『経済学批判要綱』で不変資本の価値移転が生きた労働による生産手段の合目的な消費を媒介にして行なわれると主張されている以上、その生きた労働とは具体的有用労働以外にありえないからである。第二に、ロズドルスキーの依拠する一文において「労働一般としての労働の質の結果」から不変資本の価値移転が説明されているのだから、特定の質をもつ「労働一般」とは具体的有用労働以外にありえない。「商品に含まれている労働は、使用価値との関連ではただ質的にのみ認められるとすれば、価値量との関連では、もはやそれ以外には質をもたない人間労働に還元されていて、ただ量的にのみ認められるのである。」(Kapital, I, S. 60) 第三に、ロズドルスキーの解釈の根本欠陥は、「労働一般」を文脈との関係を離れて直線的に抽象的人間労働と等置する固定観念にある。というのも、『経済学批判要綱』の「序説」における「労働一般」は、商品生産の基礎上で一様に価値形成労働＝抽象的人間労働に還元される具体的有用労働

働の総体を意味するように、「労働一般」＝抽象的人間労働という解釈は必ずしも一義的には成立しないからである（拙稿「価値論の一基本問題」〔『一橋論叢』第81巻第6号、1979年〕第4節をみよ。）

かくて、『経済学批判要綱』執筆当時不変資本の価値移転の媒介者が抽象的人間労働と考えられていたとみるロスドルスキーの解釈は、そもそも文義解釈上成立の余地がないように思われる。

- (3) 本文で指摘したように、生きた労働が超歴史的に二重性をもつという主張は、具体的有用労働と抽象的人間労働とが同一労働そのものの相異なる二重性であるというマルクスの規定と根本的に抵触する関係にある。従って、一方で「人間の労働は、その社会的形態にかかわらず、具体的有用労働と抽象的人間労働の二重性をもっている」（宇野弘蔵編『現代経済学演習講座新訂経済原論』青林書院新社、1967年、105ページ）と主張しながら他方で「労働者が二重に労働をなすわけではないが、同じ労働が異なった二面をもって作用している」（宇野弘蔵『価値論』青木書店、1965年、211ページ、圈点一頭川）という宇野弘蔵氏に代表される見解は、概念上根本的な理不尽さを内包しているといつてよい。

なお、『資本論入門』（青木書店、1968年）にも「要するに同一の労働が二面をもっている」（同上、56ページ、圈点一頭川）という宇野氏みずからの持論である抽象的人間労働＝超歴史的範疇説を根底から無効にする文言がみられる。